

## 木津川河床遺跡とは何か

40期生

### I テーマ設定理由

最近、『考古学入門』（森浩一氏著）を読んだ。その中には、僕が以前から関心を持っていた木津川河床遺跡について少しふれられていた。この遺跡に関連したところを読んでいるうちに、以前からの疑問（例えば、時代区分、成因、変化など）がわいてきて、この機会に是非、調べてみたいと思い、このテーマを設定した。

### II 研究方法

(1) まず、木津川と淀川に各1地点ずつ観察地点を設置する。木津川の方は御幸橋の手前のねん土露出地点で、淀川は牧野ゴルフ場の前の砂州である。これからは木津川の方をA地点、淀川の方をB地点とよぶことにする。



(2) A地点の雨による増水の様子の写真を撮る。

(3) それによって流された遺物を採集し、その後、時代ごとに分類、整理をする。

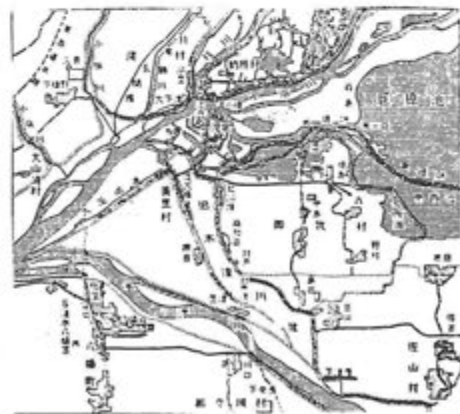
☆ あらかじめ、木津川についての資料を集めておくことは、言うまでもない。

※ (3)での「採集」とは、遺跡(A地点)を掘って遺物を得るような「破壊」するのではなく、下流の川原や中州(B地点)で遺物を採集することである。

### III 研究結果

#### 1. 木津川河床遺跡の成因

右の地図を見ると、下津屋(地図右下の下線部分)のあたりから、淀町(淀城址)に向かって、「旧木津川址」がのびている。これは、明治2年の木津川つけかえ工事以前の本流である。つけかえ以前は、木津川は淀城の真横を通りぬけ、淀川に流れこんでいた。しかし、つけかえ工事



により、流路が現在のように移されたため、そこにあった遺跡の上を、木津川が流れることになり、その結果、木津川河床遺跡ができたのである。

#### 2. 木津川(A地点)の変化

まず、木津川の雨による増水から、平常にもどるまでを日を追って見ていく。次にあげる写真は、すべて、今年の7月20日前後の雨による木津川の増水の様子である。(いずれも御幸橋より撮影)



写真  
①

日付: 7月25日

様子: 雨により、川はばが平常の2倍近くまでふくれ上がっている。これは雨が降ってから3、4日後だから、直後はすごかったことが予想される。



日付: 7月30日

様子: 5日後。川を中心より右に、小さいが、中州ができており、川はばは、ほとんど平常近くまでもどった。



写真  
③

日付: 8月5日

様子: 11日後。

中州が大きくなっているのがわかる。



日付: 8月12日

様子: 18日後。中州の周囲の水がひき、中州が川原と陸続きになった。(平常時)

このように雨が降るごとに増水して、またもとにもどる。ということがくり返されているのだが、その際に、どんどん遺跡がけずられていっている。それは、下の写真⑤、⑥を見ればわかると思う。写真⑤は昭和58年7月10日、すなわち、約3年前の状態であるが、それが現在、写真⑥のようにけずられてしまっている。写真⑤の上の方に木の根元の部分が写っているが、写真⑥では跡かたもなく、消えている。つまり、いく度もの増水によって流されて、なくなっている。このようなことからでもどんどんねん土層（A地点）がけずられているということがわかると思う。



▶ 写真⑤

### 3. 淀川（B地点）の遺物

ここでは、今回、B地点で採集したものばかりでなく、以前B地点にて採集したものもふくめて、紹介する。全てを紹介すると、ほう大な数になるため、各時代の代表的なものだけをとり上げた。



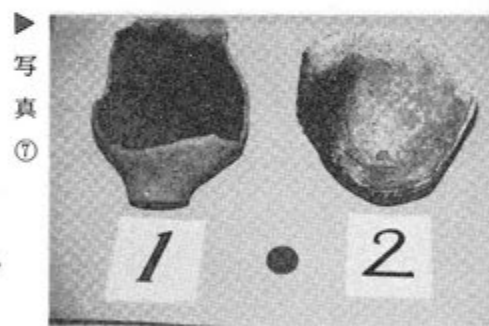
▶ 写真⑥

時代： ①②ともに弥生時代

①ははちで、②は蒸し器碗

用途： ①は何かを貯蔵するのに使われたらしい。

②は左図のように、水を入れた別のかめの上にかけて、②の中には、すのこなどをしいて、米を入れ、火をかける。すると、②の穴から上がってくる水蒸気で、米を蒸すことができる。このように使われたと思われる。



▶ 写真⑦

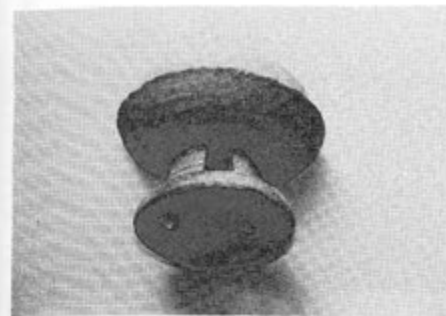


▶ 写真⑧

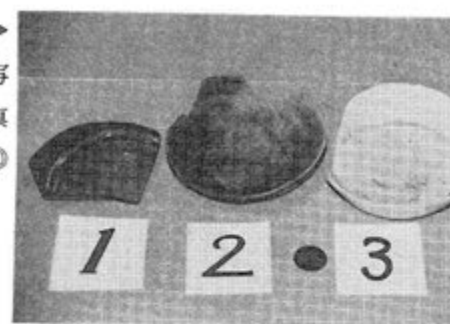
時代： 古墳時代

土師器質つば

用途： 貯蔵用として用いられたらしい。



◀▶ 写真⑨



時代： 奈良・平安時代

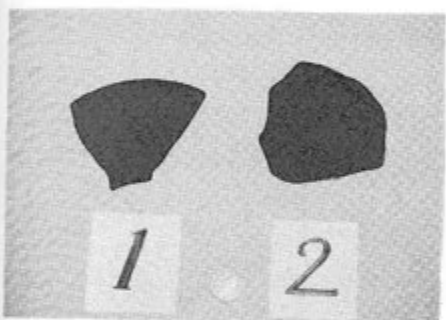
須恵器質高杯

時代： 古墳時代

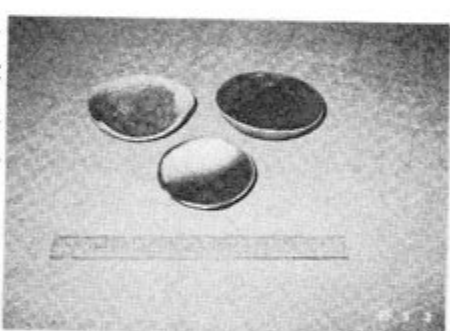
須恵器質高杯

用途： 供膳用・祭祀用に用いられ、食物を盛った。

用途： 食事の皿として用いられたらしい。



◀▶ 写真⑪



時代： 平安時代前期

黒陶土器

用途： 食事のわんとして使われたらしい。

①、②とも黒陶土器とよばれ、写真⑫の瓦器より古い。瓦器はしんまで黒くないが、これはしんまで黒い。ていねいに作られている。

時代： 平安時代末期～鎌倉時代

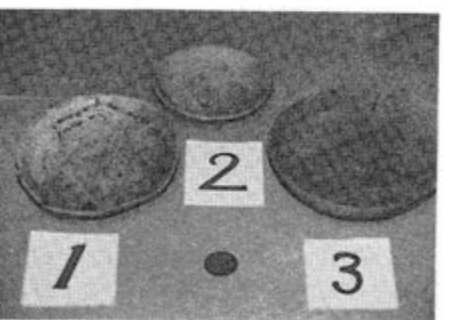
瓦器碗

用途： 食事のわんとして使われたらしい。

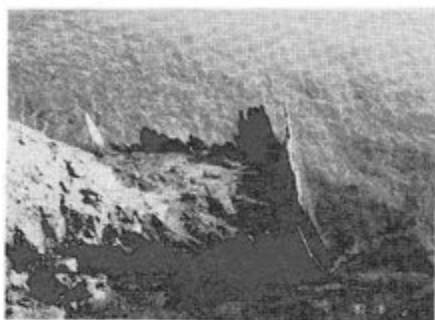
時代： 鎌倉時代～室町時代

土師器質皿

用途： 食事の皿として、使われたらしい。



▶ 写真⑬



写 写  
真 真  
⑭ ⑮



写真⑭、⑮はA地点付近にある井戸だが、2つとも、鎌倉～室町時代にかけてのものである。写真⑮の井戸は、1本の木をまるまくりぬいて作られており、直径1m以上もあるというめずらしいものである。A地点付近には、このような井戸が10ほどあちこちにある。(写真⑮のようなものは1つだけ)

#### 4. 木津川(A地点)と淀川(B地点)の関係

遺物だけにしぼって考えると、まず、右の地図を見てもらうとわかるように、木津川の中で黒くぬられ、イと書いてあるところがある。そこが木津川河床遺跡であるが、淀川の支流にあたる、桂川、宇治川、木津川の中で、遺跡がみられるのは、木津川だけである。しかも、桂川、宇治川には砂州が



みられないことから、上流から、砂利や土器片などは流されてきていないと言ってもいいだろう。三川合流点以後は、淀川には遺跡のようなものはなく、大きな砂州が現れるのも、B地点が初めてである。このようなことから、B地点にて採集された遺物はA地点(木津川河床遺跡)から流れてきたもので、三川合流点以後は、淀川の流が速いため、B地点まで一気に流されたと考えられる。

#### IV 結論

木津川河床遺跡はB地点採集物からわかるように、弥生時代～室町時代にかけての複合遺跡で、それぞれの時代は次の遺物から証明される。

弥生時代 …… 蒸し器碗、はち

古墳時代 …… 土師器質つば、須恵器質高坏

奈良時代 …… 須恵器質皿

平安時代 …… 須恵器質皿、黒陶土器、瓦器碗

鎌倉時代 …… 瓦器碗

室町時代 …… 土師器質皿

また、このような遺跡ができたのは、明治2年の木津川つけかえ工事により、流路が遺跡の真上を通るようになったためである。遺跡は雨が降るごとにどんどんけずられていっており、このままほうっておくと、消滅のおそれもある。

#### V 感想

多くの採集品の中のはんの一部、しかも、最も完全な形に近いものしか使えなかったが、それでも、分類・整理はしんどかった。

次回はもっと多くの遺物をくわしく調べ、木津川河床遺跡の中でも調べる範囲を広げたいと思う。

#### VI 反省

- 「B地点の遺物」のところで紹介する遺物の数をもう少し多くすれば、よりわかりやすい研究になっていたのではないか。
- 土器の時代を分類するのに手間どった。
- 7月20日前後の雨のすぐ後に増水の様子の写真が撮れなかったのは残念だ。

#### — 参考文献 —

- 地域文化誌『まんだ』(第12号, 17号, 19号, 20号, 25号)
- 『大和の考古学』(奈良県立橿原考古学研究所附属博物館常設展示解説)
- (財)大阪文化財協会設立5周年記念『発掘された大阪』
- 森浩一著『考古学入門』